

# 府中ホスピスを考える会通信 第4号 05/06/05



## 4周年目の会期を迎えて

小西厚子

「府中ホスピスを考える会」は、設立してから4年目になります。

会の目的「ホスピスについての理解を深め、終末期医療としてのホスピス(在宅および施設)の普及を目指す」のために、この通信の4頁に実施歴が記録されていますように、勉強会・講演会を開催・参加してまいりました。

会員数は、初年度の会費納入者数95名から、昨年度(平成17年3月末)は87名に減少していますが、会員の皆様からお預かりした会費をできる限り有効に使って、勉強会・講演会の開催を中心に活動して行きたいと、役員一同気を引き締めて4周年目の会期に向うことにしたいと考えています。

昨年、府中市制施行50周年記念市民事業に、私たちの会が企画した長谷方人氏による講演会『コミュニティで考えるこれからのホスピスケア』が採用され、11月7日に実施いたしました。この講演会で長谷氏が話された新しいホスピスとして建設中の「ケアタウン小平」(小平市御幸町)は、5月末からカタログを希望者に配布を始めているとのことです。(パンフレット申し込み方法は、下記参照) 市の広報にこの講演会の開催記事が掲載されましたので、広く市民の皆様の目にとまり、初めての参加者も会場にお見えになり盛会に終わりました。また、府中医師会、市役所内の担当部署や福祉保険部等にチラシと会報を持って伺い、私たちの会について広報活動をいたしました。

第12回勉強会として、6月5日に行う講演会は、森山レイ子会員にご経験をふまえたホスピスの必要性についてお話していただきますが、当日参加できない会員の皆様のために、概要を書いていただきましたので、この通信に掲載しています。

今年度も、会員の皆様とご一緒に、府中ホスピスを考える会の活動を前進させて行きたいと思っております。

- \* 「ケアタウン小平」のカタログの申し込み先  
メール=[info@akatsuki-kinen.net](mailto:info@akatsuki-kinen.net)  
ホームページ=<http://www.akatsuki-kinenn.net>

# 声

## “夫をガンで見送って” —入院治療3ヶ月後の不安—

森山 レイ子

健康体を自負していた夫が、平成13年の夏、脊椎狭窄症の手術の結果、悪性リンパ腫という血液ガンに冒されていて、放置すると余命3ヶ月という宣告に大きな衝撃を受けた。

M市にある総合病院で整形外科医による手術を受け、併行して泌尿器科で導尿装置挿入、抗ガン治療に向けての諸検査を重ね、9月から、血液内科医による点滴・採血・注射・服薬の抗ガン治療が始まった。この治療は三期繰り返すという方法で、治療効果のバロメーターとされる白血球の数値が正常値にあり第一期は順調にクリアし、9月末に退院した。

入院生活約3ヶ月後のことで、本人は勿論、家族も明るさを取り戻した思いだったが、二期、三期の治療は通院と在宅ですることになる。

予約とはいえ長時間待ち、治療を受け、大量の薬の処方を済ませ、一日がかりでクタクタに疲れる。三科交互に頻繁な予約日で、その度にタクシーを呼び、病院までの往復に約8000円。思いがけない出費だった。

この年の12月「府中ホスピスを考える会」の発足会が日野原先生をお迎えして開かれ、先生は「三人に一人がガン患者になる時代で身近にホスピスの必要性」を話されたことが心に残る。当事者として私は強い関心を抱き参加し即入会した。

夫の治療は12月で三期を乗り切り、平成14年新年早々から連日20日間、最後のとどめの治療として放射線治療が組み込まれていた。照射する局所の確認のため、上半身は碁盤の目のようにサインペンで線だらけ。照射の影響で血尿が多くなり、導尿装置のカテーテルが詰まり、昼夜を問わず一日何回も泌尿器科に往復し治療をしなければならない日が続く、心身共に最も苦痛の大きい治療で、本人は二度と放射線治療はやりたくないと言っていた。

以前より軽くなつたものの足のしびれは続き、導尿装置や腰痛用のコルセットは着けたままだが、陽春と共に快方に向い、通院も3ヶ月に一度程度になり自分で車を運転して行ける様になり、3年間のこの小康状態が大きな支えになっている。

毎回の予約日には快方にあると診断されながら、昨年10月、救急車で入院し、再発のため集中治療を受けることになった。この治療が間もなく3ヶ月になろうとする12月末に「現代医療上での全ての治療は施したので、あと転院して療養するように」との病院の説明に奈落の底に突き落とされた思いで大きな不安の日が続いた。病院は最後まで病人をみってくれる所と思い込んでいたのに、どうすればよいのだろう...と悩み、心あたりの医療機関に問い合わせ療養生活の場を探し回ったが、死を目前にした最愛の家族の最後を人間の尊厳をもって見送れる所が見つからないまま、入院中のベッドで、家族の見送りも間に合わずに本年1月13日に旅立ったことが無念である。数少ないホスピスは待機者が多く、入所順位は気の遠くなる現状だった。

ガンが国民病といわれる今日、日本にはガンに対する指令塔がなく、従って専門医も極めて少ない。この対応に遅ればせながらやっと厚生労働大臣が指令塔になり、この4月から動き出したという。NHKでも最近何回かこのテーマが取り上げられ放映された。

ホスピスの必要性を切実に体験した者として、身近に一日も早く設立されるように声を大にして呼びかけていきたい。

## “ガンは免疫力で自然治癒する”・・・安保免疫学の紹介

滝山 満子

現在、日本人の死因別死亡率は、悪性新生物（がん）がトップ。3人に1人がガンで死亡しているという。しかも日本人のガン死亡率は年々上昇を続けている。

私の周りを見ても、父も母も兄もガンで亡くなり、姉もガンに罹り、5人家族のうち4人までがガンで、まだガンの診断が出ていないのは私ひとりだけである。当然、私もそのうちに多分、などという思いが頭をよぎる。

ガン情報には高い関心をもっているなかで、最近「安保免疫学」の記事や本を目にした。新潟大学大学院医学部教授安保徹先生の説く、身体に自然にそなわった免疫力を高めることで、ガンも自然治癒させることができるという説である。病気の発症にはストレスが深く関わっていて、ガンもその例外ではない。心身をリラックスさせる副交感神経を優位にする（免疫療法）生活をおくれば、ガンになることを防ぐことができるという。さらに「恐怖心をあおるガン検診は受けない」「現在のガン治療の主流を占める、手術、放射線、抗ガン剤の三大療法が免疫力を下げ、死亡率を上げている」「ガンの転移は治る前兆。免疫力で打ち負かされ散らばったのが転移。転移先のガンは小さくなっており、免疫力を弱める誤った治療をしなければ治る」とも主張する。

以上、日本医学会の常識とは異なる安保理論を目にして、私は2年前に胃ガンで亡くなった兄の最期を思った。兄は胃の全摘手術を受け、その後、抗ガン剤治療は受けずに、有効な免疫療法を模索しながら、結局、免疫療法は受けることなく1年半後に亡くなった。病みぬいたその最期を思うと、もう70歳を超えた私がガンになったならば、身体に大きなダメージを受ける手術は避けて、免疫療法に継るかもしれないと今は思う。

参考 \*東京新聞 H・17・1・9「こちら特報部」の記事

\*マキノ出版 安保徹「ガンは自分で治せる」



安保 徹氏

参考

決定版！安保教授と福田医師の免疫を高めて病気を治す「生き方」革命のすすめ

人間には免疫力とって、自ら病気を防ぎ、治す力が備わっています。病気が治らないのは、この免疫力が低下し、体を守りきれない状態にあるためです。免疫力の低下をもたらす元凶は心身のストレスです。働きすぎや悩みごとなどのストレスが自律神経のバランスを乱し、白血球のバランスを乱して、免疫力は低下していくのです。自律神経は、全身の血管や内臓などの働きを無



福田 稔氏

意識のうちに調整している神経で、細胞を興奮状態にする交感神経と、休息状態にする副交感神経がシーソーのようにバランスをとって働いています。活動の時間帯である日中は交感神経優位、リラックスの時間帯である夜間は副交感神経優位になって、生活のリズムを整えています。

\*マキノ出版 安保徹・福田稔 より

## 府中ホスピスを考える会講座実施歴

日付	テーマ	講師
特01/10/28	がんと向きあったとき、あなたならどう生きますか	聖路加国際病院名誉理事長 日野原 重明
102/02/17	「ホスピスの体験から」	ピースハウス病院ナース 杉本 真由美
202/04/28	「在宅ホスピスケアについて」	ピースハウス病院ナース 杉本 真由美
302/07/14	「緩和ケアで使われる薬について」	薬剤師(元ピースハウス病院職員) 玉井 照枝
特02/10/11	アサヒタウンズ特別講演会「日野原先生」	
402/11/24	「心と身体の痛みを癒すには」	くらしき作陽大学教授 篠田 知瑋
503/05/18	地域に密着した在宅ケアについて	平林医院院長 平林 竹一
603/06/10	ホスピスセミナー	桜町聖ヨハネホスピスケア研究所長 山崎 章郎
703/08/03	「ヨーロッパのホスピス事情」	府中ホスピスを考える会副会長 市村 晴子
803/10/26	家で最期をむかえるためにー在宅ホスピスケアの実際	ホームケアクリニック川越院長 川越 厚
904/04/18	「家族の立場からホスピスケアを見る」	府中ホスピスを考える会会員 駒ヶ嶺 泰秀
1004/09/10	輝いて生きるー人生の後半をー	聖路加国際病院名誉理事長 日野原 重明
1104/11/07	コミュニティで考えるこれからのホスピスケア	聖ヨハネホスピスケア研究所研究員 長谷 方人
1205/06/05	夫をガンで見送ってー入院治療3ヶ月後の不安ー	府中ホスピスを考える会会員 森山 レイ子

## ガンが治る 10カ条

- ①自分の状態を100%理解している人
- ②気合いの入っている人、迫力のある人
- ③行動をすぐ始められる人
- ④徹底的にやる人
- ⑤患者さんを支える人がいる人
- ⑥責任を取ることのできる人
- ⑦ガンは自分の力で治してやろうと思う人
- ⑧ガンの声を素直に聞ける人
- ⑨「ガンは治る」と信じている医師とともに闘う人
- ⑩治った人、治ると思っている人とつきあい、友達になっている人

会計より会員の皆様へのお願い 会費の払い込みをどうぞよろしくお願い申し上げます。勉強会・講演会等当日でも、郵便局への振込でも結構です。振込用紙ご入用の方は、会計までご連絡いただければお送りいたします。

会計 宇田ひさ子 042-363-9271

編集後記 通信4号をお届けします。この号は、新しいガン医学・免疫療法についての記事を取りあげて紹介することにしました。日常生活の中で免疫力を高めるためには、バランスのよい食事、またストレスを溜めないことが必要。皆様のご参考にしてください。

「通信」編集委員 荒川京子、小西厚子、滝山満子、村上淳子、和田総一郎

発行元 府中ホスピスを考える会編集部 連絡先 小西厚子 042-351-4583